

とおのものがたり

遠野物語 柳田国男

やなぎたくにお

靑空文庫を元としています

参考 … ウィキペディア

柳田国男(やなぎたくにお)一八七五年(明治八年)〜一九六二年(昭和三十一年)。民俗学者。

「遠野物語」は、現在の岩手県遠野市に伝わる不思議な話を聞き書きした本で、日本民俗学を切り拓いた名著。明治四十二年に出版された。

序文で柳田は、「この話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。願わくはこれを語りて平地人を戦慄(せんりつ)せしめよ。…『今昔物語』のごときはその当時にありてすでに今は昔の話なりしに反し、これはこれ目前の出来事なり」と述べ、聞き取ったこと、現在の話であること、人々を戦慄させる要素があることを述べている。

掲載文は、次のような内容である。「栗を拾いに山に入った農家の娘が、行方不明になる。二、三年過ぎて、ある漁師が山に入ると、岩穴のようなどころで娘を発見した。どうしてここにいるのかと問うと、「恐ろしき人」に連れてこられて、逃げるすきも見いだせず、ここにいるのだという。それはどんな人かと聞くと、普通の人間のように見えるが、すごい目をしていて、背がとても高い。その人間との間に子どもができたが、自分に似ていないといつて、食べたのか殺したのか、どこかに連れて行ってしまおう。五日に一回ほど、同じような人間が四、五人集まって話をしている。持ってくる食物などから見ると、町に出て調達してくることもあるようだ。こうして話をしているうちにも、帰ってくるかもしれない、と話すので、猟師は怖ろしくなってきたという。二十年ほどまよって帰ってきたという。二十年ほどまよって帰ってきたという。」

よく誤解されることだが、柳田国男がこの「遠野物語」で集めた奇譚は、古代の話や昔話ではない。「目前の出来事」である。また、単に農村に残る伝承譚でもない。柳田は、遠野を「煙花の街(華やかで賑わっている街)」としており、事実遠野は、交通の要衝として栄えていた。大切なことは、社会というものが一様に近代社会となるのではなくて、いろいろな社会意識が層をなしていることであった。社会は、その生死観、家族認識、宗教観、自然認識など多様で立体的な構造をもっており、それらの理解なくして人間を理解することはできない。柳田が作り上げた民俗学は、こうした考えを踏まえて、日本人の故郷を探り、「人間苦」を書き留めてきたのであった。その原点として、「遠野物語」は、今後も読者を捉えて離さない本となっている。

七 上郷村の民家の娘、栗を拾いに山に入りたるまま帰り来たらず。家の者は死したるならんと思ひ、女のしたる枕を形代として葬式を執行い、さて二三年を過ぎたり。しかるにその村の者猟をして五葉山の腰のあたりに入りしに、大なる岩の蔽いかかりて岩窟のようになれるところにて、図らずこの女に逢いたり。互いに打ち驚き、いかにしてかかる山には、おるかと思えば、女の曰く、山に入りて恐ろしき人にさらわれ、こんなところに来たるなり。遁げて帰らんと思えど、些の隙もなしとこのことなり。その人はいかなる人かと思ふに、自分には並の人間と見ゆれど、ただ丈きわめて高く眼の色少し凄しと思はる。子供も幾人か生みたれど、我に似ざれば我子にはあらずといいて食うにや殺すにや、みないずれへか持ち去りてしまふなりという。まことに我々と同じ人間かと押し返して問えば、衣類なども世の常なれど、ただ眼の色少しちがえり。一市間※一に一度か二度、同じようなる人四五人集まりきて、何事か話をなし、やがて何方へか出て行くなり。食物など外より持ち来たるを見れば町へも出る事とならん※二。かく言ううちにも今にそこへ帰つて来るかも知れずという故、猟師も怖ろしくなりて帰りたりといえり。二十年ばかりも以前のことかと思はる。

(※一)一市間は遠野の町の市の日と次の市の日の間である。月六度の市なので、一市間は五日間のこと。(※二)食物は、(近辺で間に合わせるのではなくて)どこか外部から持つてくるようである。町に行くことでもあるのだらう。